伝道局報

――2025 年 12 月　日発行――

日本キリスト教会北海道中会

□目　　次□

開会礼拝説教……1
伝道協議会プログラム……2
全体ディスカッション……3
報告①札幌手稲前田……3
報告②美深……4
伝道所の現況報告と課題
森……6　夕張……7
美瑛……8　札幌手稲前田……10
北桧山……10　富良野……11
北広島山手…12　奈井江……14
稚内萩見……14　美深……15
中会伝道局から中会内の皆様へ……　17
中会伝道局から「特別献金」のお願い…17
編 集 後 記 ……18

開会礼拝　説教

聖　書　コリントの信徒への手紙一　16 章 13−18 節
説教者　森下一彦（札幌発寒教会牧師・北海道中会議長）

13 節と 14 節には勧告が記されております。最初に「目を覚ましていなさい」と呼び掛けます。信仰を眠らせることなく、むしろ主イエス・キリストの再臨を想起させようとしています。次に「信仰に基づいた生活」を送ることを語ります。私たちが受け取った福音も、授かった信仰も決して概念的なものではありません。むしろ、堅い信仰に基づく生活に立ち続けねばなりません。そして、「雄々しく」生きるのです。主が共にいてくださるからです。これが「強く生きること」なのです。たとえ強くなれなくとも、雄々しくなれなくても、それでも主が共にいてくださるのを覚えて生きて行くのです。ここに私たちの本当の強さがあります。そして最後に「何事にも愛をもって行うこと」が勧められます。すべての事柄に対して、愛がなければ、一切は無に等しく、何の益もないのです。

私たちは、これを今日初めて聞いたのではありません。礼拝の席で説教壇から語られた言葉を何度も聞いたはずです。また、私たちはこのみ言葉を何度も繰り返して読んでいるはずです。そして、私たちは聖書の言葉を真剣に受け止めて実践し、教会や伝道所を建て上げ、主に仕えて来た信仰の先達や、信仰の友を知っています。私たちは、その中で信仰が養われ、育てられて、いま、この開会礼拝の席に着いているのです。

15 節以降に記されるステファナの一家や、17 節に記される 3 名の人物も同様です。彼らは教会の仕え人たちでした。ここに名が上げられている人たちが具体的にどのような働きを重ね、どの様な奉仕の業を主にささげて来られたのかは、現在の私たちには分かりません。でも、彼らは主のために仕え、自分自身をささげ、教会・伝道所のために用いられて来た人たちなのです。この私たちも同じです。私たちの信仰を支え、私たちのために祈って下さった信仰の先達の多くは、もう既に召されて行ったかもしれません。私たちも信仰の友や先達が残していった教会・伝道所に仕える者となりました。何よりも、主なる神様がいま、この私たちを用いてくださり、教会・伝道所のために働く者として召して下さったのです。私たちも、後の時代のために、キリストの体なる教会・伝道所を残し、ともに礼拝を捧げる場所を保ち、神様から委ねられた

キリストの福音を宣べ伝えねばなりません。
　教会も伝道所も小さく、弱くなりました。恐れはあります。不安もあります。でも、「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい(13・14 節)」という御言葉を覚えて、それぞれに託された務めを全うしたいのです。

2025 年度　伝道協議会 プログラム

日時:9月 15 日(月・休)～16 日(火)　会場:札幌琴似教会

2025 年度　中会伝道協議会
テーマ 「賜物を生かして互いに仕えなさい」
～地域と繋がる伝道の取組～
会　場　札幌琴似教会
司　会　照井　勝（滝川教会・伝道局理事）

【1日目　9 月 15 日(月)】
12:30～13:00　参加受付

13:00～13:15　開会礼拝
司式・説教　森下一彦(札幌発寒教会・北海道中会議長)

13:15～14:30　全体ディスカッション　司会　照井 勝

「賜物を生かして互いに仕えなさい」
～地域と繋がる伝道の取組～
報告　①札幌手稲前田伝道所特別集会報告から
報告者:　経塚武(札幌手稲前田伝道所委員)
②美深伝道所 「小さな町の小さな教会の大きな出来事」
報告者:北村一幸(美深伝道所指導教職)

14:30～14:45　休憩

14:45～16:30　グループトーク(各グループ、祈りにより閉会)

17:00～19:00　伝道所報告(夕食会)

【2日目　9 月 16 日(火)】
9:30～11:50　課題共有のための懇談会
司　会　森下真裕美(札幌琴似教会・伝道局理事長)
指導教職、応援教師、理事

11:50～12:00　閉会祈祷

全体ディスカッション

「賜物を生かして互いに仕えなさい」

～地域と繋がる伝道の取組～

報告①　札幌手稲前田伝道所　特別集会報告から

報告者:委員　経塚　武　　経塚久子

日　時　　2025年5月25日（日）午後3時～4時
主　題　　特別集会　認知症のこと学んでみませんか
　　認知症のあれこれ―認知症についての理解と対応を深めましょう―
講　師　　下村笑子さん（札幌認知症の人と家族の会　監事）
　　日本基督教団札幌教会会員、元神愛園理事・評議員、他
参加費　　300円（役立つ「暮らしの手帳」を配布）
出席者　　20名（教会員、客員、離れていた教会員、近所の方、講師友人や他教会員など）
伝道活動　A4カラーチラシを8500部ネット注文
　　道新新聞折り込みセンターに依頼して、5月15日(木)新聞折り込みによる地域への配布を行った。
　　伝道所前に看板を設置した。
　　北海道中会ホームページによる案内。
　　近隣教会へチラシを送付して協力を呼びかけた。
報　告　伝道所の中会応援伝道は2015年以来のことになります。通常の礼拝も4－5名で年配者も多く奉仕者も少ないため、特別集会をしたい思いはあったのですが長く実施できないでいました。それでもみんなで協議して取り組んでみると、「チラシ作成、中会への申請、講師との交渉、新聞店への連絡、離れている教会員への手紙」など、自然と役割分担ができて全員で積極的に準備にかかることができました。地域に開かれた教会として新しい方々を迎えようという意欲が与えられたことは大きいと感じています。何よりもいつも同じメンバーで礼拝を守っているやや内向きな雰囲気が、特別集会によって教会の中に新鮮な風が吹き込むような心地よさをみなが感じ取りました。「今回が最後」という思いがないわけでもなかったが、終わってみると「また特別集会を実施したい」という感想だった。中会応援伝道を認めてくれた伝道局、祈ってくださった方々に心から感謝します。

報告② 美深伝道所　「美深伝道所の最近の変化から」

報告者:指導教職　北村一幸

1、簡単な歴史

1901～1902　聖園教会員多数この地に入植
1901　ピアソンによる開拓
1903　山口庄之助～1910　　1904(明治 37,2,2　定期中会にて美深講義所開設)
　　1907　近藤直作ら3所帯が佐呂間へ
　　1908　大久保虎吉ら3所帯が名寄、士別へ
1911　河内広三郎～1916　最初は信徒伝道者のちに准允を受けた
　　1914　第1代目の会堂建築
1917　三田地寿典
　　1918　小笠原尚衛ら 60 名が南米へ移住。
1918　竹内　浩　　1920
1921　池野朝雄　　1921
1922　坂野龍雄　　1925
　1928　会堂消失　　1929 新会堂献堂(第 2 代目)
1929　宮川　勇　　1936
1937　深山佐太郎(17 年在任)1953　　1951　新日キ加入
　　1940.6 幼稚園開設～1945.7　道の認可～1974 閉園(町へ移管)
　　1941　教会(独立)建設(士別伝道所も兼牧)
　　1941　教団へ加入
　　1943.1～1945.9　国民儀礼を行った。　新日キ加入(1951)
1955　河田一雄　　1959
1960　田嶋やすし　1966
1967　樺山かね
1968　南　　純　　1977　1974　新会堂建築(第 3 代目)
　　幼稚園閉園 1974、町へ移管
1978　枝松博展　　1984
1986　吉沼詳夫　　1988
1990　藤塚　惠　　2003　　1996　会堂外壁大工事
2004　大倉薫(兼)2008
2009　石田　健　　2011
2012　加藤正勝　　2018
教会解散・伝道所開設 2019
2019　北村一幸(兼)　LGBT青年の受洗(男女区別を廃止、式文の問題)
　　会堂改修工事(約 504 万円　うち中会から 50 万円補助)

※「北のひとむれの歩み」(1983.10 中会歴史編纂員)の美深教会紹介文の最後の言葉
「開拓と時を同じくして、福音の宣教が開始された。開拓の困難さ、自然条件の厳しさの中で福音の光が燈され続けて来た。今日に至るまでの歩みは、道北の砦として、広く道北全体に目を向けた宣教、教会形成に取り組んで来たと言える。」

※幼稚園が 1974 年に閉園しているが、その時に通っていた園児は 56 歳、56 歳～90 歳

までの方々は幼稚園のある教会に馴染み、深い思い出がある。

2、中会の中の位置づけ
　　地理、教職の配置、伝道局応援（理事問安、経済的支援、祈り）
　　厳しい状況下での経済的支援に感謝；現在は申告制

3、「北海道中会の 10 年後に備えて」（2020.1 発行）この時から早、15 年
　（2つの考え方；教職の数と配置、複数教会で一人の教職を経済的面から思索）から
「宣教協力の新たな可能性を目指して」 2022.8.22　久野真一郎
　　～持続可能な応援の形と教会再編成の試み～

　これからの中会内の教会、伝道所、伝道地の地図予想
　　1）複数教会・伝道所で一人の教職、
　　2）複数教職による一つの教会・伝道所の牧会
　　3）複数教職による複数の教会・伝道所の牧会
　　4）統廃合による結集、第3地への結集など
　　5）開拓伝道の可能性（人口動態、必要性）
　　その他、大会伝道局による支援（応援伝道、大会伝道地候補）

4、招聘制の中での派遣(伝道所に関して)の課題
　（余談；お寺の考え方　）

5、美深伝道所、現在の状況（2024 年報告）
　礼拝出席　3.7 名　　祈祷会　3.3 名　　SS 特別集会 23 名（大人も含め 83 名）
　　説教者　第1　北村一幸(14:00)
　　第2(10:30)古賀清敬　第3　小野寺泉　第4　浅井永　第5　北村一幸
　　2024 年度の会計の極めて大まかな数字で概略を紹介
　　収入　237 万円（礼拝 30　維持 40　感謝 20　特定など 32　収益 70　中会 45）
　　支出　237 万円（謝儀　168　伝道　37　管理 23　　大中会　9）

6、この数年で起こっていること（神のなさっている事柄；感謝と試練）
　1）一人のクリスチャン婦人の美深町への移住によって、変化
　（根来みどり姉の文を紹介）
　　町の人達が教会に求める姿（教会が拒むことは何か、人々の思いや願い）
　　教会が人々に求めること(教会の考える理想)
　2）一具体的例事、考えるべきこと；教会主催と町民主催（共催）とどこが違うか？
　3）93 年間を美深の地で生き、証人であった蓮沼優裕長老の札幌移住の意味は？

7、これから
　1）眠った信徒係累の発掘（近藤順子、瓜田夫妻、谷一家）
　2）町民との様々な接触（これまで、これから）
　3）中会との関り
　4）定住牧師無しの牧会、宣教の厳しさ
　5）旭川教会との繋がり
　6）共同牧会と複数教職協力による伝道所のありよう

伝道所の現況報告と課題

■森伝道所　報告

報告者:指導教職　条　広国

1. 現　状

2025年 1 月現在の森伝道所の現住陪餐会員は 1 名である。2021 年まで3名であったが、1名(男性)が施設に入所したため2名となっていた。その内の会計担当の委員が2024年治療のため休職し、残り 1 名が会計を代行した。休職していた会員は 2024 年末から復帰したが、今度は会計を代行していた会員が家族の都合で 2024 年 12 月に森伝道所に函館相生教会への転出願を出し、2025 年 1 月に函館相生教会の転入が小会で承認された。よって、現在の会員は 1 名となっている。

この 1 名は森町に在住し、伝道所の管理も行ってきたが、その負担軽減のため、これまで毎月第三主日午後のみ伝道所に行っていた牧師と夫人が、毎月初めの平日にも伝道所に行き、郵便物の処理、伝道所の清掃、敷地の除草、その他管理を行っている(往復時間を含め 4 時間程度)

礼拝は毎月第3主日午後 2 時からささげている。函館相生教会の礼拝後、牧師と夫人と教会員2名が森伝道所の会員と共に礼拝をささげ、聖餐式も行っている。通常の礼拝出席者は5名で、イースターとクリスマス礼拝には、この他に数名の函館相生教会員が出席して、10 名程度となる。

礼拝後、短い時間で懇談の時をもち、会員の近況報告や会堂の状況確認などを行っている。伝道所の会員が増える見込みは薄い。月一度の礼拝のため、森伝道所の存在が地域の住民にどれだけ知られているか分からない。道路際の日本キリスト教会森教会という看板(以前の名称のまま)と会堂の壁の掲示板に常設の集会案内とその月の礼拝の説教題と掲げることで、この場所に教会があること礼拝を行っていることが分かるようになっている。

7 月 29 日(火)に第 3 回道南地区牧師会を、例年の函館相生教会ではなく、森伝道所で開催した。礼拝室にも集会室にもエアコンが設置しているため、快適と好評だった。今後教会・道南地区・中会の小規模な会議・研修会・集会などに利用が可能である。

2. 礼拝と集会の状況

・第3主日午後2時　礼拝　司式・説教・聖餐式執行:牧師条広国、奏楽条みち代
・説教は、礼拝予定表(3 カ月に一度作成)に基いて行っている
・祈祷会は、行っていない

3. 礼拝出席者の構成(第3主日に関して)

・現住陪餐会員1名と函館相生教会から4名　計5名(2025年現在)
・2024年度の礼拝出席者:平均　男　1、女　5、計　6名

4. 伝道所委員会

・第 3 主日午後1時 30 分　議長:条広国、委員:松山慶子(会計)
・教勢報告、会計報告、次月の礼拝、中会・大会からの通知に関しての協議。
＊集会案内、次月の礼拝予告、大・中会・道南地区、その他の報告は、週報に掲載して配布。

5. 課題

月に一度の礼拝であるのは、牧師の兼牧と会員の減少と高齢化のためやむを得ない。函館相生教会からの長老の出席も高齢のため難しい現状である。信徒の家族に呼びかけ、地域の住民に森伝道所の存在を知らせ、礼拝以外の集会にも利用して伝道につなげることが課題である。

■夕張伝道所　報告　　報告者:牧師　渡辺輝夫

6 月 8 日ペンテコステの日に

第 74 回定期中会に報告した現住陪餐会員は 2 名（委員 1 名）は昨年度と変わりありません。委員一名の状態で一年すごしましたが、感謝なことに今年 1 月の定期委員会（1/12）での委員推薦を経、定期総会（1/26）で委員一名擁立が議され翌週の礼拝のなかで就職式を行いました。時を経ずして、古い教会員が亡くなり、自宅で葬儀を執り行いました（2/12）。

ただ、このように小さい群れながらも、思いがけず、受洗志願者（80 歳）が起こされるという変化も報告いたします。その方が初めて教会を訪れたのは、2020 年 4 月 12 日（日）、イースター礼拝の日でした。当時コロナ禍全盛で行き場を失い、唯一開いていた（彼の表現）教会へ飛び込んできたという訳です。以後 5 年目の今年 4 月 13 日（日）礼拝直後、「この教会に入りたい」と表明をされました。教会に入るというのは受洗をすることだと申し上げたら、そのつもりだと明言されました。難聴が進んでいるのと、キリスト教信仰への理解が十分とはいえませんが、生涯の終末期を迎えた彼の捨て身の決断を重くうけとめ、理事傳英二教師陪席の試問で受洗が認められました（5/25 この日は伝道局問安を兼ねました）。

6 月 8 日（日）はペンテコステの日でした。目まぐるしいスケジュールで、午前に委員会、その後、先に召された教会員の埋葬式（ここにベルギーから一時帰国された夕張伝道所出身の女性も立ち会ってくれました。彼女はそのあとの洗礼式も一緒でした）。こうして当日のペンテコステ礼拝は洗礼式も加わり、晴れやかで祝された時となり、礼拝参加者も大きな喜びを与えられました。当の受洗者は自ら号泣してしまったと直後告白しておられました。

教会親子開放日（あそびばバンビ）の試み

「歴史ある教会の建物と雰囲気を味わいながら本を読んだり、もの作りをしたり、話したり、遊んだり、思い思いのひとときを過ごしましょう。子どもも大人も、どなたもご自由にどうぞ」 ＜出入り自由＞　そんなコンセプトで今年 2 月から月 1 回（最後の土曜日）4 時間を教会開放日とする試みが始まりました。中心になってリードしているのは、夕張市立診療所の非常勤女性医師で保育園の園長さん。市内の北部地区はかつて炭鉱中心街でしたが、いまや限界集落を思わせるような衰退ぶり。集う場も見出せないところ、教会の小さな空間（スペース）に光があてられました。はじめはおどおどしていた子どもたちもやがて会堂内を走り始めるのです！　こどもとおとなで 10～20 名が集まってきます。驚くことにこの試みが「幸福の黄色いハンカチ基金」からの助成（12 万円）が認められたのです（「夕張市北部地域における子ども体験・多世代交流事業」）。ここでは宗教勧誘は一切しないという教会側の自己規制を前提としていることはいうまでもありません。

地域・市民の中で

1)「夕張の医療を考える集い」を「夕張・いのちと暮らしを考える集い」に改称

今年 3 月 8 日(土)第 5 回目を開催しました(この成り立ちについては既に前の協議会で報告していますので割愛いたします)。今回は何と読書会！でした。上掲「生物権」がテキストです。2011 年 3 月 11 日、東日本大震災で福島県大熊町(東電福島第一原発立地地)で定年後東京から移住して農業を営んで居られたご夫婦が夕張の地に避難・定住。さらに当地で再度野菜づくりに挑戦しながら、長年温めてこられた問題を自費出版されたものです。文明の発達に伴い、逆に地球の自然を破壊し続ける人類のありかたを「生物権」というキーワードで振り返る意欲作。10 名も集まってくれればと内心思っていたのが、何と 24 名の参加！熱気溢れる集いになりました。

2)「～つなごう記憶と記録～平和へのメッセージ展 2025」(8/29～31)

今年 6 回目を迎えた企画です(内一回コロナで休会、前年協議会で報告)。夕張市は久しく広島へ毎年二名の中学生を派遣し、原爆被爆の実相に触れさせ報告を重ねてきました。その関係者(おもに教員)が中心になって、当時を写した写真パネルや広島の高校生が被爆者から聞き取ったものを描いた原爆の絵を展示して平和への想いを強めてきたのです。それに教会関係者も加わり始められた企画です。今年はさらに戦後夕張に定住することになった樺太引き揚げ者の経験談に耳を傾けるときも持ちました。「もう争いは嫌だ」という声をどこかで叫びたいという市民の受け皿にこの企画がなっているようです。最終日は講演会、ことしは夕張出身の加藤博文さん(北大アイヌ・先住民研究センター教授)による「アイヌ・先住民研究が示唆する世界：平等性・多様性・平和研究」でした(29 名参加)。これらの関わりは、この世との「同盟関係」(D・ボンヘッファー)を求める教会の営みと理解しています。

その他―宗教法人の移転

当伝道所の土地と建物を単位宗教法人から包括法人日本キリスト教会へ移行する件については昨年報告しましたが、現在その手続きが具体的に進んでいます。今年度の定期総会の議を経て、必要な諸文書を作成し、7 月 16 日に北海道空知総合振興局総務課に提出、8 月 18 日付けで受理されました。これから法務局関係の手続きに入ります。

■美瑛伝道所　報告

報告者：指導教職　小野寺泉

はじめに

北海道中会によって支えられている事を覚え感謝している。

Ⅰ.現住陪餐会員　1 名

その他の陪餐会員5名(内、2 名は他市へ転居、1名は他教会)

Ⅱ.礼拝(8 月平均)

男 2 女 0.25 計 2.25

※1 月～8 月礼拝参加者0名は無し

※1 月～6 月　定期的来会者 2 名

Ⅲ.その他

嵯城家記念式(9 月 2 日)於嵯城宅

男 6 女 6 計 12 名

Ⅳ　いくつかの事

1. 2025 年主題聖句

「わたしは、この岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力も対抗できない」(マタイ 16:18)

この主イエスの御言葉は主日礼拝を維持、充実することで具体化する。

2. 2025 年に伝道開始 130 年を迎える。

11 月 2 日(日)記念礼拝

記念講演　仮称わたしたちの時、宇宙の時

講師佐治春夫(天文台美宙台長、理学博士)

3.宗教法人日本キリスト教会美美瑛教会解散

・9 月 2 日(火)嵯城家記念会後。教会員に説明

・9 月 28 日(日)問安懇談会で、問安使森下一彦(中会議長)・前指導教師千葉保より手続きを含め具体的に説明。

Ⅴ.

1. 会堂整備に関して

(1)2023 年、教会の左の畑を芝生に変更。

手入れが追い付かず、雑草に覆われている。

(2)教会の納屋扉修理未

(3)教会の台所棚修理未

(4)教会屋根ペンキ塗り検討。

(5)庭木の剪定、草抜き。

毎年と同じく実施中。

※教会納屋と芝生にした場所を、駐車場にする案も出てきている。

現在は教会の前庭に 2 台駐車。後は路上駐車している。

2. 礼拝の充実に関して

(1)主日礼拝の継続

①毎週の主日礼拝へ。

現在、第一・第三主日には他教会員 1～3名の礼拝出席がある。

②週報の活用

週報を利用する習慣がないため、伝道文書としての活用へ。

(2)夏季特別礼拝

※2025 年は、わたしが美深伝道所の応援に伴って多忙なであるため中止。

2025 年イースター礼拝後の写真
後列左端が現住陪餐会員田中愛子姉、
その他の方々は田中姉の姉妹と友人、
及びソルゲ、井口君と友人。

■札幌手稲前田伝道所　報告

報告者:指導教職　秋本英彦

現在会員が3名(50 代と 70 代後半)、客員 2 名と説教者で午後2時から礼拝を守り続けている。礼拝体制は第 1 と第 5 主日が古賀清敬教師によるエレミヤ書講解説教。その他の主日は月 1、2 回秋本が説教するか秋本が作成した説教原稿を代読しながら出席したメンバーだけで礼拝を守る形となっている。秋本が礼拝説教をする主日には「委員会、教会掃除、DVD学習会」などを行っている。今年は 5 月に中会応援伝道を行ったため、そのための話し合いを礼拝後に多く持った。

昨年冬 12 月末までは伝道所で礼拝を守れたが、2025 年 1 月から冬期にかけては会員並びに客員は札幌桑園教会の礼拝に合同とライブ配信によって礼拝を守った。これは伝道所の冬期除雪業者が見つからなかったためで、毎年の課題であるが伝道所前の道路(通路)は狭く機械での除雪ができず人力による除雪業者も見つからなかったためである。幸い隣家の佐藤氏が除雪機を購入して伝道所前の道路を好意で除雪してくれたため予定よりも早く 3 月から伝道所での礼拝を再開することが出来た。

今年は 5 月に中会応援伝道を行えたことが一番大きいと感じている。詳細は別途報告したので割愛するが、教会は礼拝を守る姿勢と外に向かって伝道する姿勢を忘れてはならないと感じた。7 月下旬から 8 月中旬にかけて秋本が約一ヶ月に及び急性声帯炎症のために声が出なくなった際は急遽伝道所の文書問安(8 月 10 日を予定)を 8 月 17 日(日)理事による問安に変更していただき礼拝の場を守ることができた。対応してくださった中会伝道局に心から感謝している。専住牧師のいない伝道所はどこも同じだと思うが、どうしても兼任という形になるため牧師一人では時間的体力的に及ばない面が出ている。今後も中会の協力を得ながら礼拝と伝道に専念してゆきたい。

■北桧山伝道所　報告

報告者:指導教職　丸　徹

1.　現状報告　2024 年度

(1) 教勢

・現住陪餐会員　2 名(前年 2 名)

・求道者　3～4 名

・礼拝出席　平均 3.1 名(前年 3.3 名)　2 ヶ月に一度苫小牧教会丸徹牧師の応援を受けて礼拝。その他の主日は、牧師作成の説教 CD を用いて委員が司式をしている。

・祈祷会　出席平均 2.6 名(前年 2.9 名)　月 3～4 回実施
・婦人会　出席平均 1.8 名(前年 1.6 名)　月 1 回実施
内容　テキストを輪読　会堂の保全　草取り　会員の交流

(2) 委員会　2 ヶ月に 1 回丸徹牧師と委員 2 名で実施している。その他の月は、委員で実施

(3) 問安　9 月に伝道局理事長　森下真裕美牧師より、「問安の辞」が送られ朗読。2025 年度は、9 月 23 日(火・休)に伝道局理事長　森下真裕美牧師が来訪の予定。

(4) 伝道集会　7 月 14 日(日)に実施　出席者 8 名
2025 年度は 7 月 20 日(日)に実施　出席者 11 名

2.　伝道所の礼拝の現状
礼拝については、毎週委員により行われているが、現在、現住陪餐会員は 2 名である。しかし、求道者が熱心に出席してくれ、委員 1 名で礼拝することは、年に数回である。

3.　今後の課題・願うこと
(1) 求道者が定着し、受洗に導かれることである。
(2) 毎週の主日礼拝が守られることが一番の目標である。現在、求道者に支えられていることは本当に感謝である。
(3) できるだけ多くの人たちに教会の存在を知ってもらい、礼拝に導かれる人が起こされるよう祈りつつ伝道の業に励んでいきたい。

■富良野伝道所　報告

報告者　牧師　小野寺泉

はじめに
日頃から、中会伝道局をはじめ、皆さんの祈りに支えらえていることを感謝しています。富良野伝道所の報告は以下のとおりです。

Ⅰ.現住陪餐会員
(1)現住陪餐会員　男 0 女 7 計 7 名
(2)求道者：30 代女性求道者⇒求道者のために読書会(毎月一回開催)に参加。

Ⅱ　集会
(1)主日礼拝　8 月平均　男 2.6 名女 7.2 名　計 9.8 名
※聖書箇所
第一主日福音書(現在ヨハネ福音書)
第二主日書簡(コリントの信徒への手紙一)、
第三主日旧約聖書(創世記 1 章～3 章)、
第四・第五主日旧約聖書(現在、出エジプト記)
(2)聖書を学び祈る会　8月平均　昼男 1.8 女 0.3 計 2.1 名　夕男 1 女 0.8 計 1.8 名
現在、サムエル記下を学んでいます。
尚、聖書研究のプリントがあります。必要な方には、お分けします。
(3)礼拝後～12:00　読書会　休会

Ⅲ　特筆事項

1. 定期集会の変更について

2025 年は、毎月第三主日に牧師が美深伝道応援のため出張するため、また牧師が毎週美瑛伝道所での礼拝に奉仕するため、礼拝後の定期集会は変更もしくは、中止することとなった。

(1)第三主日は、創世記 1 章～3 章からみ言葉を聞く

(2)第三主日は、委員が説教原稿代読をする。

(3)委員は、説教原稿代読するため、礼拝説教準備会に参加する。

礼拝説教準備会は以下のことを行っている。

①学習「信徒の説教はどうして可能か」

牧師・長老の職務論からは信徒による説教は導き出せない。

説教が事実教会を誕生させ、維持しているという説教論から導き出される。すなわち次のような理解に立つ。「啓示された神の言葉：イエス・キリスト⇒書かれた神の言葉：聖書⇒宣教される神の言葉：説教」

②説教準備の実際

黙想：「第一の黙想」の重要性

聖書テキストを歴史学の対象とし、古代中東の文献として釈義する以前に、現行の聖書をよく読み御言葉を思い巡らす

釈義：テキストの文脈と構造に注目した釈義

説教：牧師の説教原稿を読み合う。

③教会員の反応

1. 最初は、良いお話を聞く態度であったが、現在は普通に礼拝説教として聞いている。

2. HP 開設　担当者　30 代男性求道者(高校 3 年生の時から教会に来ている)

週報・月報・聖書を学び祈る会プリント・読書会プリントなど掲載。ご活用くださると、嬉しいです。

※現在、以下の方法でアクセスできます。

①URL　https://io520jcf.wixsite.com/--hp

②QR コード

■北広島山手伝道所　報告

報告者　委員　石川洋右

1. 教勢

教　勢	2024 年	2014 年	差
礼拝出席者数	男 3　女 7　合計 10	男 7 女 15　合計 22	－14
陪餐会員	男 4　女 15　合計 19	合計 38	－19
うち現住陪餐会員	男 2　女 10　合計 12	合計 22	－10

10 年前と比較すると礼拝出席者が 12 名、現住陪餐会員が 10 名と大きく減少している。2024 年現住陪餐会員は 12 名とあるが、2025 年 8 月現在では 9 名であり差は 13 名である。

2.教師について

第 1 主日	10 時 30 分	教師　八田牧人　中会教師
第 2 主日	14 時 00 分	指導教職　高田昌和　小樽シオン教会牧師
第 3 主日	10 時 30 分	教師　渡辺輝夫　夕張伝道所牧師
第 4 主日	10 時 30 分	教師　渡辺輝夫　夕張伝道所牧師
第 5 主日	10 時 30 分	教師　渡辺輝夫　夕張伝道所牧師

3.委員会の開催
　第 2 主日礼拝後に開催
　指導教職　高田昌和
　委員　書記　石川洋右　　会計　尾崎邦嗣　　委員　松藤聖子　　委員　寒川ナミヱ

4.札幌東部四教会の活動
　①2 月 23 日　第 1 回協議会
　②6 月 15 日　合同墓前祈禱会　当伝道所から 2 名の出席があった。
　③10 月 19 日　長老委員相互問安　北広島山手伝道所には札幌白石教会から、
　　北広北広島山手伝道所からは札幌白石教会へ。
　④11 月 23 日　第 2 回協議会

5.11 月 23 日　伝道局問安　小華和理事

～北広島山手伝道所の今後について～

北広島山手伝道所指導教職　高田昌和

２０２５年２月５日、定期総会の席上、会計役員から、現在特別会計は６００万余であり、毎年の通常会計の赤字を補填しているが、１０年後には特別会計は０円になる。この教会を今後どのようにしていったら良いのか非常に不安である。との意見が出され、伝道所の存続の危機について伝道所全体で初めて共有されることになりました。
その後委員会では、北広島山手伝道所の閉鎖を含めて、今後の方向性を検討することになり、閉鎖する場合には会堂を壊して更地にする必要があるのではないか、というところから、教会の解体費用は最低限残さなければならないのではないか。そのためには、どうしたらよいのか、伝道局とも相談する、ということになりました。
　その後、伝道局の理事の皆様との協議を挟み、この危機意識を教会員とも共有し、今後どのような方向性にもって行くか、教会全体で模索していかなければならない、というアドバイスをいただきました。またそのためには、教会全体での意思統一がひつようである、とのアドバイスを併せていただきました。

　このため、
１．今北広島山手伝道所が置かれている状況を共有する
　　このための懇談会を１０月１２日（日）礼拝後に行う。
２．これからの進む道の可能性について確認する
（１）このまま進めば、財政的に破綻する。また教会員も高齢化により減少する。
（２）伝道局から補助金を申請する（申請は来年度分から行う）
（３）延命処置を受けて、存続か、廃止か、教会の合同か、廃止後に協力教会に転会するか
　　などを委員会を中心に、教会全体で協議をする
３．この中で、教会員はどうしたいかを確認し配慮することを第一とする。
４．伝道局、札幌東地区の教会と連絡を密にとりながら、可能性を模索する。
という方向性の中で、今後検討を行う見込みとなりました。

■奈井江伝道所　報告　　報告者:指導教職　森下真裕美

〇教勢報告

本年度陪餐会員総数　24 名(前年度　24 名)

現住陪餐会員　4 名(前年度　5 名)　　未陪餐会員　12 名

教会員総数　36 名　礼拝出席者　平均　7 名

〇2025 年 4 月からの礼拝体制(第二主日のみ午後 2 時～、その他の週は午前 10 時 30 分～)

第一主日　教師　秦　利器　原稿(音声データによる説教)

第二主日　牧師　北村　一幸(旭川教会)　説教

第三主日　教師　久野　牧　説教(聖餐式執行)

第四主日　聖園教会との合同礼拝(聖園教会は、滝川教会とのオンライン礼拝)

第五主日　教師　三輪泰嗣　原稿(教会員による代読)

2024 年 4 月から始まった体制では、月のうち 3 週を説教者を迎えての礼拝としていましたが、2025 年度を迎えるにあたり、教会員、指導教職また中会内の状況も変わり、そのままの体制の継続は困難となりました。そのような中で新たな礼拝の形として検討したのが、近隣の聖園教会との定期的な合同礼拝です。それによって、「礼拝のための説教(者)の確保」と「礼拝とそれに続く交わりの豊かさに与る」ということを目指したのです。

合同礼拝は、聖園教会に赴いての実施となるので、教会員がこれまでどおり礼拝をまもれるのかについて確認をし、また実際の礼拝を想定して、教会間での礼拝や奉仕の形、あり方について準備をしました(具体的には、週報の準備や献金の扱い、礼拝奉仕者について等)。

この形での合同礼拝は、4 月第 4 週からスタートの予定でしたが、それに先駆けて、第 3 週のイースター礼拝では、説教者を迎えた奈井江伝道所に、聖園教会の方が集っての合同礼拝も行われました。このような礼拝の実施のためには、準備と連絡を丁寧に重ねることが必須です。けれどそうすることで、教職が限られる中、複数の群れが、説教者による説教や聖餐に共に与り、喜びの時を、人が集うことで豊かに分かち合うことのできる一つの道が開かれるのではないでしょうか。

また、未整備であった宗教法人の代表役員の変更については司法書士に依頼し、手続きを完了させました。ただその後、代表役員の件だけでなく、その他についても法的に整備されていない点が確認されました。こうしたことは、週ごとの礼拝をまもっている中では、なかなか取り組むべき課題と認識されにくいものです。ただ、教会の形やあり方が変更されたりする時には、こうした点は避けては通れないものとなることを、強く感じさせられています。

協議会(委員会)は、指導教職の都合により平日に行っています。ただ、教勢や働き人の変化の中で、伝道所の今と今後について、教会全体で話し合い、思いを分かち合うことが必要と考えました。そこで、去る 12 日(金)に全体協議会を実施したところです。

■稚内萩見伝道所　報告　　報告者:牧師　浅井　永

「希望をもって前に進む」

中会諸教会の方々にいつも祈りに覚えて頂き、伝道局の温かい指導と支援があり感謝である。教会関係者と共に最北端の地において福音伝道の使命に仕える恵みと幸いを喜び感謝している。常に体調や健康などの温かい気遣いを受け色々と助けられて感謝である。年々忘れっぽくなって色々と迷惑をかけることが多くなり申し訳なく思う。主の豊かな恵みと憐みにより、こどもと大人合同の礼拝が守られ、よい交わりが与えられて一同喜び感謝している。会計

は伝道局の支援により支えられて感謝である。予算を縮小して支出を抑えているが物価高騰などによって生活が圧迫される厳しい現状があり、収入減少は避けられない。教勢と財政の減少、高齢化による様々な問題と支援、青少年の成長見守り、若者への伝道、信仰の継承など課題が山積している。主が成長させてくださることを信じて、希望をもって前に進もう。
恵みに感謝し、喜び、祈り、交わりを深め、皆で楽しく主につながって、み後を歩んで行こう。

＜現況等＞（2025年8月現在）
・礼拝　　18名前後
・日曜学校　　2名前後
・現住陪餐会員　16名（内3名未成年者）
・伝道局問安　7月31日（木）理事竹井　剛（帯広教会牧師）

＜現状と課題＞
⑴礼拝や行事案内の声かけをしている
⑵お茶、飲食、行事等の時間を大切にして語り合い、交わりを深めている
⑶朝礼拝に来れない人などへ第2礼拝を午後3時から実施している
（第4は牧師不在で休み）
⑷休んでいる人の連絡やお知らせ及び情報発信にインターネット、SNS などを活用している
⑸日曜学校生徒の成長に伴う出席減少、少子高齢化、青年の進学や就職などの流出による教勢の減少
⑹若者への伝道、交わり、信仰の継承など
⑺青少年の成長の見守り、高齢化による病気、けが、認知症、免許返納など、本人や家族の現状を知って情報の共有と支援
⑻伝道局補助費の減額要請及び光熱費や物価高騰などの生活費増大に伴う財政の減少
⑼将来に向けて段階的に会堂の修繕工事ができるような資金計画
⑽牧師辞任後の伝道所存続対策

＜要望＞
伝道局補助費の減額要請は理解できるが、補助費減額は伝道所の財政を非常に厳しくすることになるので再考してほしい。

■美深伝道所報告　　報告者：指導教職　北村一幸

先日、「福音時報 7 月号」に美深伝道所が取り上げられ、全国の方々に、「道北の小さな町の小さな教会」を知っていただいたばかりです。重ねて報告することもありますが、お覚えくださいますように。

北海道のほぼ中心にある旭川から北の果て宗谷岬に近い稚内、そこまで車を走らせると約5時間、およそ250kmの距離。この中間に、人口3600人ながら特急列車が停まる小さな町、美深があります。

全国的な名称「銀座」通りに匹敵する「大通り」国道 40 号線と重なっていますが、その大通りの角地に教会はあります。かつて、原野である荒地に、白い洋館の姿で教会は建てられていました。初期の頃の開拓者、近藤直作は、旭川教会の坂本直寛(坂本龍馬の甥)牧師から受洗。その仲間、開拓に従事した人々は同時に町の歴史を担い、またキリスト者となり教会を

支えました。町の歴史と教会の歴史はほぼ 1901 年から重なっていると言っていいでしょう。

この長い歴史の中に特筆すべき信徒及びその家族を挙げて見ますと、第 1 は先にも挙げた近藤直作とその家族、その中からの近藤治義（小樽シオン教会）牧師が活躍しました。第2はこの町の主産業でもあった木材業で名をはせた松浦周太郎、彼は国会に進出、運輸・通産大臣として美深を世に知らしめただけでなく、美深教会に長老として務め教会を堅固なものとしました。

現在の会堂は南純牧師の時代に建てられ、かつては幼児教育を担いましたが、町人口の減少と共にその役目を終え、今は御言葉が語られ御言葉に聞く信徒の小さな群という役目を果たしている教会です。

初期には米国長老派宣教師 G.P.ピアソン宣教師の協力もありましたが、歴代専住牧師は山口庄之助、河内広三郎、竹内浩、宮川勇、深山佐太郎、河田一雄、田島やすし、南純、枝松博展、吉沼詳夫、藤塚恵、石田建らで、のち 2011 年からは今日迄、無牧師となっています。

さて一昨年の春、一人の姉妹がこの町に住み着きました。「この小さな町に教会発見の驚きと共に、いつも扉がしまっている。」そう思っていたのに、ある日の日曜日、開かれた扉を発見、喜び入って来られました。それから、ほぼ毎週の礼拝出席している中で、その昔、東京・東洋英和女子高校生時代に受洗したことを懐かしく思い出されました。この美深教会に通い、聖書を読み讃美歌を歌う時、胸は熱くなりました。やがてはピアノでの奏楽を駆って出られるほどとなりました。彼女の眠っていた教会籍を探しましたところ、富士見町教会の伝道地として生まれた旧日キ・日本基督教団・雪ヶ谷教会にその籍はありました。美深伝道所に転入会。少数の教会員は喜びに溢れました。それにしても彼女は何故この町に住んだのか。それは天塩川のゆったり流れ下る水、護岸壁が無い天然の穏やかな長い長い大河に惹かれたからです。更に緑萌える山野、極寒の地での真っ白い雪中の生活、それらに感動する人は彼女ばかりではありません。移り住んだ人々と、地元の人々との豊かな交わりが始まったのです。片や、町の人々は、大通りの角地に立つ教会が電気もつかず暗闇の中に佇んでいる姿を不思議がり、この町に灯りを増やしたい、雪の季節、クリスマスの時期には、教会を明るくし、待つ中にクリスマス・キャロルを響かせたい、と願うのでした。彼女とその仲間たちは、町の人々の思いに応えるようにして、町民クリスマスを教会で開くことに導かれたのです。教会堂を生かし、教会の持つ文化や歴史を掘り起こし、クリスマスを教会で、という趣旨に賛同して、大人も子どもも大勢が詰めかけました。忘れていた教会でのクリスマスを楽しみ、讃美歌、キャロリング、クッキー、プディングなどによって、人々の喜びの心が教会のうち外に、町に溢れました。このような二冬めが終わりました。今、神の計らいに感謝すると共に、世にある教会、地域にある教会として、そこからキリスト・イエスを伝えて行ければと願っているところです。この年、2025 年も計画が始まっています。

先日 7 月 10 日(木)に伝道局から問安使鴇田咲子理事を迎え、感謝と喜び、課題を共有できましたが、この日は、この地で 96 年の生涯、81 年の信仰生活を過ごされた蓮沼優裕長老を札幌の高齢者施設へ送り出す日でもありました。集いました 9 名の者たちは、「再びこの美深の地に帰って来てください」と言い、蓮沼兄も「必ず、帰って来ます」、との言葉を交わし合いましたが、淋しくもまた悲しみの日でもありました。足の不自由な蓮沼兄のこともあり、普段は1F 集会室で礼拝を捧げていますが、クリスマスの時だけは、蓮沼兄は、皆によって抱えられ担ぎあげられて、大勢の人たちと共に礼拝を守ることができました。教会の蓮沼さん、町民の蓮沼さん、その蓮沼優裕兄が居ない時があっても、主の礼拝を堅く守って行く覚悟を新たにしているところです。

ところで現在、礼拝は第2古賀清敬、第3は小野寺泉、第4は浅井永、第5主日を北村一幸が担当し午前 10 時半から。第 1 主日だけは午後2時から、北村一幸が担当しています。説教者が立てられ礼拝が守られていますこと、何ものにも代えがたい感謝溢るる事柄です。

2024.12.24　外は凍てつく寒さ、クリスマスの光が教会からこぼれます。

中会の祈り、経済的な支援に感謝すると共に、この地で福音が語られ続けられることを願うものです。

中会伝道局から中会内の皆さまへ

中会伝道局の働きのために祈り、お支え下さっていますことを心より感謝いたします。伝道局は、大きく、中会の伝道の働き全般に関わることと、中会内の 10 伝道所に関わることに仕えています。

それらの働きのために必要な財政の多くは、各教会からの「維持献金」と、「秋の伝道献金」によって支えられています。どの教会も、厳しい状況の中、精一杯応えてくださっていることに心からの感謝を申し上げます。

献金だけを求めるのでなく、2026 年度に向けては、各伝道所への「補助費」について、群れの働きや願いに添った額を改めて検討いただき、減額に協力をいただけるよう、お願いをしているところです。それらの協力や理解をいただきながら、伝道局としては、限りある財源の中にあっても、伝道に関わる働きや必要な支援を、今後も責任をもって継続していきたいと願っております。

また、今年はすべての教会や伝道所を対象とした以下のような取り組みが、大会伝道局によってなされていますので、ここにご紹介いたします。どうぞご活用ください。

「教会および伝道所のウェブ環境を構築する小委員会」の設置

オンライン礼拝やウェブ会議、公開学習会等の受信・視聴のための設備等の環境整備の支援を始めました。設備の購入等は各教会や伝道所で行っていただくことになりますが、そこに至るまでの様々な相談や技術的な指導に、各中会に立てられた担当者が応じます。そのために担当者が各教会・伝道所に赴く際の出張費は、大会伝道局で負担いたします。

北海道中会の担当者および連絡先　中澤　禎(札幌琴似教会)

tadashi.nakazawa@gmail.com

中会伝道局から「特別献金」のお願い

祈りと奉仕を通して、日々中会伝道局の働きをお支え下さっていることに感謝申し上げます。伝道局財政は、そのほとんどが各教会の「維持献金」「克己献金」そして「秋の伝道献金」によって支えられています。それぞれの教会が厳しい財政の中、この様にお応え下さっていますことに心より重ねて感謝いたします。

伝道局財政も年々厳しさを増し、各伝道所を支える「補助費」支出を今後も続けていく上での困難さについては、これまでも皆様に報告してきた通りです。この現状を踏まえて、伝道局がその困難さを克服するために努力する事はもとよりですが、このことに対する理解を深めて、中会に属する教会、また個人の皆様からも「特別献金」としてご支援いただければと願っています。

つきましては以下に送付先を記載いたしますので、よろしくお願いいたします。

特別献金（感謝献金） 送金口座 ： ゆうちょ銀行
口座番号 ： 19070 5253891
口　　座 ： 日本キリスト教会北海道中会伝道局

「伝道局への特別献金（感謝献金）についてのお問い合わせ先」
E-mail ： h-c-kohanawa-60@gmail.com
Tel/Fax ： 011－893-1018　担当　小華和 坦

編集後記

例年８月に開催している伝道協議会を、今年は９月の休日を利用して９月 15 日～16 日の二日間で開催いたしました。稚内など遠方からの参加もあり、出席者は 47 名、オンライン参加３名でした。

今回のテーマを「『賜物を生かして互いに仕えなさい』～地域とつながる伝道の取り組み～」と掲げ、開会礼拝後に、札幌手稲前田伝道所と美深伝道所より、それぞれ 30 分ほど活動報告をいただきました。両報告からは、伝道所が置かれた厳しい現状以上に、テーマを具現化した「多様性における一致」が共通して伝わってきました。それぞれの地域性や教会の状況、課題は異なりますが、イエス・キリストの福音宣教のために各自に与えられた賜物が、たとえ小さな働きであっても、それが一致して用いられる時に教会は活性化し、地域とのつながりが生まれるという、伝道の本質的な視点が示されました。

その後の分科会や夕食を兼ねた各伝道所の報告、そして２日目の「課題共有のための懇談会」では、対面で交流できる恵みと喜びを改めて実感しながら、互いの思いや意見を活発に交わし合いました。共有された主な内容は、教勢の減少、教師不足、今後の会堂維持、伝道所の存続に関わる問題など、重い課題ばかりでした。このような課題を前に、危機感や閉塞感が押し寄せてくることも事実です。しかし、札幌手稲前田伝道所と美深伝道所の報告を通して、改めて伝道の原点の大切さを思い知らされたのでした。

主イエスは昇天される前に弟子たちに、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコによる福音書 16 章 15 節）と命じられました。この宣教命令を、主イエスと共にある喜びの中で、互いに祈り合い、聖霊の知恵をいただき、与えられた賜物を用いて成し遂げていこう――。そんな励ましと希望を与えられる協議会となりました。

伝道局理事　局報担当
竹井剛（帯広教会）

発行：北海道中会伝道局

〒060－0001　札幌市中央区北一条西 13 丁目２　日本キリスト教会札幌北一条教会内
電話（011）221－4455